

# 嘉峪関



山丹を出発した長距離バスは、長城を左窓に見ながらシルクロードを西進する。張掖で一泊し、次の目的地の酒泉にむかう。嘉峪関は酒泉に隣接する嘉峪関市の郊外にあり、明代長城の西の端として知られる。

甘肅省から新疆ウイグル自治区に至る道筋には、無数のオアシスが黄河の西を細長い廊下のようにつらなっている。古くから河西回廊とよばれる武威、張掖の先にあるのが酒泉で、それに敦煌を加え、古来、河西四郡と称されてきた。

嘉峪関市は製鉄の街である。1955年4月、中央政府は西北地方に調査隊を派遣して祁連山脈の山中に相次いで複数の鉄脈を発見し、嘉峪関地区で製錬を開始したのである。酒泉鋼鉄会社が操業を始めたのは1958年8月1日で、鉄脈の発見からわずか3年後のことだった。現在の嘉峪関市は人口18万人に達し、市民の大半が直接あるいは間接的に鉄鋼産業にたずさわり、市内の各所には鉄のオブジェが散在している。

万里の長城の西端に位置する嘉峪関は「天下第一関」と愛称される。長城を行く旅の出発点であった山海関の「天下第一関」に対応した命名にちがいない。古来、万里の長城の起点はここ嘉峪関にあった。それは関中平野の長安や洛陽などに都をおいた歴代の漢民族政権が、モンゴル高原から西域に跋扈した匈奴やチベット系タングート族、あるいは契丹などの異民族を恐怖して築いたのが長城だったからである。モンゴル族の元朝を滅ぼした明は都を南京から北京に遷し、満州族をはじめとする北方異民族の侵入を阻むために中国東北部の防備を拡充する。それにともない、万里の長城の起点は西域の嘉峪関から渤海湾沿いの山海関に移り、そこを「天下第一関」とした。

宿泊した金葉賓館から嘉峪関までは車で20分ほどの距離である。沼のような九眼泉のほとりにある外城の東閘門をくぐると、そこには観光用のラクダが繋がれていて楽しい。外城は長城の一角を構成している。その左奥の舞台では、ちょうど地方劇が始まったところだ。往時、高官の来訪、あるいは凱旋の兵などをねぎらった娯楽装置である。文昌閣をぬけると眼前に光化楼が屹立する。ここからが内城だ。嘉峪関は一辺が160メートルほどの長方形の城壁で、これまでに見えてきた山海関や大同郊外の得勝堡、銀川の横城壁と構造が似ている。

東西にのびる嘉峪関は異民族の襲撃に直接さらされる西辺の関楼、その後ろに控える柔遠楼、そしてもっとも安全な光化楼の三つの城楼からなっている。「柔遠」とは遠方の夷狄を平定して服従させることで、「光化」は異民族を華（文明）化することをいう。関楼で捉えた夷狄を柔遠楼で服従させ、光化楼で文明化して中華に組み入れる中国古来の順化思想が、西域を防衛する嘉峪関の建築様式に貫かれているのだ。あくまでも形式の話である。

関楼から西南方向を見やると、土手のように低い長城が雨に煙る祁連山脈に向かって一直線に進み、蘭新鉄道と交差している。明の長城は嘉峪関で終わるが、漢代には敦煌の西はるか玉門関まで達していた。新疆ウイグル自治区のカシュガルにも長城に付随した烽火台の遺構があることが、最近の調査でわかってきている。



▼文昌閣の南側にある劇台。乾隆57(1792)年に改修されて現在に至る。天井には対極八卦図、壁には八仙が色彩あざやかに描かれ、意匠が精緻である。嘉峪関を訪れた高位の賓客に芝居を供する施設であったことがうかがえる



▲観光用のフタコブ・ラクダをすすめる地元民。ラクダのむこうは文昌閣、その後ろが内城で、光化楼の屋根が見える。文昌閣は明の正徳元(1506)年に建造されたもので、嘉峪関に駐在する文官の事務所だった



は「天下第一関」と愛称される。長城を行く旅の出発点であった山海関の「天下第一関」に対応した命名にちがいない。古来、万里の長城の起点はここ嘉峪関にあった。それは関中平野の長安や洛陽などに都をおいた歴代の漢民族政権が、モンゴル高原から西域に跋扈した匈奴やチベット系タングート族、あるいは契丹などの異民族を恐怖して築いたのが長城だったからである。モンゴル族の元朝を滅ぼした明は都を南京から北京に遷し、満州族をはじめとする北方異民族の侵入を阻むために中国東北部の防備を拡充する。それにともない、万里の長城の起点は西域の嘉峪関から渤海湾沿いの山海関に移り、そこを「天下第一関」とした。

中村達雄(なかもら たつお) ◆ラジオペキーン、オンラインバス、博報堂などに勤務し、中国に16年間駐在する。現在 明治大学非常勤講師